

2024年6月23日聖霊降臨後第5主日説教

ヨブ記 38 章 1-11、16-18 節

コリントの信徒への手紙二 5 章 14-21 節

マルコによる福音書 4 章 35-41 (5 : 1-20) 節

本日の旧約日課はヨブ記です。主なる神様がヨブに語り掛ける部分です。そこは、「知識もないまま言葉を重ね、主の計画を暗くするこの者は誰か」(ヨブ 38 : 2) と始まります。「計画」という言葉は、新共同訳では「経綸」、口語訳では「計りごと」となっていました。第一の意味としては「助言」や「忠告」なのですが、主なる神様がヨブに対して語り掛けるのですから、「計画、経綸、計りごと」と訳されたのでしょうか。いずれにしても、ここでは主なる神様がヨブに向き合い、語り掛けています。そのあとに続く言葉は、ヨブに対する厳しい言葉の数々なのですが、主なる神様が直接自分だけに語り掛けてくださること、これこそが人間にとって最も喜びであること、それを示しています。そして、そうであるがゆえに、人間のさまざまな思いから生まれる争いの絶えない現代においても、この主なる神様の言葉は、重要な言葉として響くのです。

「私が地の基を据えたときあなたはどこにいたのか。それを知っているなら、告げよ。」(ヨブ 38 : 4) から始まる言葉は、天地創造に関することに始まり、自然界における事柄、そして、悪に関する事柄、死に関する事柄と、物理的、精神的事柄すべてについて、人間は主なる神様以上に何を知りうるのかと問いかけます。簡潔に言えば、人間は主なる神様と比較すれば、どのような人であってもはるかに及ばない、同じ人間にすぎないということです。38 章 2 節の言葉は、42 章 3 節でも用いられ、『知識もないまま主の計画を隠すこの者は誰か。』そのとおりです。私は悟っていないことを申し述べました。私の知らない驚くべきことを」とヨブは述べ、ヨブ記の実質の最後といえる部分で、ヨブは「私は耳であなたのことを聞いていました。しかし今、私の目はあなたを見ました。それゆえ、私は自分を退け塵と灰の上で悔い改めます」(ヨブ 42 : 5-6) と語ります。何の落ち度もないヨブ、むしろ、『聖書』の中でもっとも模範的・信仰的人物であったとも言えるヨブが、何の落ち度もないのに、不幸・悲しみの底に落とされ、最後に悔い改めます、で終わるのは、なんとも納得いかないのですが、納得いかないのは、人間的に言葉を重ねて考えてしまうからでしょう。主なる神様を見ること、その言葉を聞くこと、つまり主なる神様に会うこと、それが人間にとってもっとも幸福なことである、そのことに納得がいけないからでしょう(簡単に納得してしまうことも問題ではありますが)。

しかし、主なる神様に会うことが人間にとって最高の幸福である。このように考えることは、少し注意しなければなりません。この地上で何が行われても無関心でよい、あるいは地上のいのち、それが自分のものであっても他者のものであっても、軽く考えてよい、そのように思ってしまう可能性があるからです。ヨブ記が語る大切さは、そのようなことではありません。主義、主張、価値観、善悪の判断、歴史観など、なんであって人間が作り上げる「何か」は、主なる神様に会う以上の価値はないと語っているのです。

この時、「ヨブ記」という文書自体も人間が作り上げた「何か」ではないか、『聖書』そのものあるいはそこから引き出される信仰や教えも、その人間が作り出す「何か」ではないか、という問いが出されると思います。確かに、かつて『聖書』はその存在自体や、教会がそこから引き出す解釈が絶対的価値を持つと考えられた時もあったかもしれませんが、それは間違いです。ヨブ記を含む『聖書』は、それ自体が『聖』であることを超えて、『聖』なる方が誰であることを示すものです。人間の理解・解釈は必要ですが、その理解・解釈を超えた何かを示すのが『聖書』に他ならないのです。その意味では、『ヨブ記』がもっとも『聖書』らしい文書といえるかもしれません。読むものをその期待や価値観を超えて、ヨブとともに主なる神様に導くからです。

さて、本日の使徒書、コリントの信徒への手紙二をこのヨブ記と直接結び付けることは難しいのですが、本日の個所には、パウロを理解する上で、非常に大切な言葉があります。それは5章16、17節の「それで、私たちは、今後誰をも肉に従って知ろうとはしません。かつては肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。だから、誰でもキリストにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去り、まさに新しいものが生じたのです」という部分です。「肉に従って」という言葉をどう解釈するかは意見が分かります。しかし、パウロはここで人間の思いを超えてキリストを理解することの大切さを語っています。そして、そのように考えるとき、キリストとの結びつきが生まれ、それを知った人が新しく創造されるという現象が起こる、そう語っているのは確かであると思います。これは、律法を解釈・実行することによって、主なる神様に従おうとしていたパウロに、ヨブの最後の悟りのような、大きな転換点起きたことを示しています。

福音書は、《》の中も含めると、ガリラヤ湖でイエス様が突風を鎮める話と、悪霊に取りつかれたゲラサ人の話と二つのお話があります。これらは直接ヨブ記とは結びつかないですが、イエス様に対する登場人物たちの反応という視点から考えますと、見出すことができます。それは、イエス様が一緒にいても自然の驚異を恐れてしまう弟子たちの姿と、自分たちが邪魔ものと思っていたゲラサの人がイエス様に癒され救われても、その事実もイエス様も受け入れられないゲラサの人々の姿です。もちろん、それぞれには人間的な理由がありますが、それはそうかもしれないという理由があるのですが、弟子たちは、イエス様がともにおられる喜びと安心を理解できなかつたのです。ゲラサの人々は、同じ場所に住んでいる悪霊に取りつかれた人の苦しみも、そこから救われた喜びも、理解できなかつたのです。主なる神様が、イエス様を通しておられるとき、何が起きるのかを、人間的な思いから理解できない、受け入れられない人間の姿がそこにあるのです。両者ともヨブのように悟れなかつたのです。

主なる神様に会うことが最高に幸せ、この少し危ない結論は、今でも大切です。死は終わりではないとイエス様が示す事柄と同じくらい、大切です。だからこそ、パウロが「つまり、神はキリストにあって世をご自分と和解させ、人々に罪の責任を問うことなく、和解の言葉を私たちに委ねられたのです。」(2コリ5:19)の通り、この世界にまことの和解が訪れるために、『聖書』から学び祈り続けたいと思います。